The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞クラリッセ・リスペクトル『ソフィアの災難』 福嶋伸洋/武田千香編訳（河出書房新社、2024）：現代に「生きる」クラリッセ・リスペクトルの文学
Author(s)	江口, 佳子
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2024, 50, p. 59-65
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98444
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

クラリッセ・リスペクトル『ソフィアの災難』福嶋伸洋/武田千香編訳（河出書房新社、2024）

現代に「生きる」クラリッセ・リスペクトルの文学

江口 佳子

1. 意識の内奥

クラリッセ・リスペクトル（Clarice Lispector, 1920-1977）の作品では、主人公の容姿は容易に想像できないのだが、その人物の感情、思考、行動は鮮明に読者の脳裏に残る。文学者ネリー・ノヴァィス・コエーリョは、リスペクトルのデビュー作の長編小説『野性の心の近くに』（*Perto do coração selvagem*, 1943)の主人公ジョアーナについて、次のように述べている。

> 実存的不安に囚われ、言葉で表せないものを表現するために、あるいはむしろ、日常的な関係の因習的な外見の下に隠された様々な感覚の混沌を、本来の直線的な言語という織物の中で整理するために、可能ないし不可能な言葉の力と執拗に格闘する女性像のギャラリーに登場する最初の女性である [1]。

コエーリョは、作家リスペクトルについて、単なる内省的な小説を書いたのではなく、自己意識の曖昧な場所を模索しようとする人物を生み出したと評価している [2]。

本書『ソフィアの災難』には、リスペクトルの初期から晩年までの短篇集全 6 冊の中から、訳者によって精選された 29 篇の短編小説が収められている。各作品を楽しめるだけではなく、リスペクトルの文学創作の軌跡や変遷についても辿れる、贅沢な作品集である。

リスペクトルの最初の短編小説「勝利」（1940）は、語り手が物語世界の外にいるが、ストーリーの大部分において、女性主人公の視点に重なり、主人公の視点が前景化する主観的な語りとなっている。主人公ルイーザは夫と口論し、夫が家を出てしまう。家に残さ

---

[1] Coelho (1993), p.174
[2] *Ibid*., p.178

れ、翌朝目覚めると、以前から壁に飾られていた絵画の海の景色について、「これほどいきいきと動くような水を見たことがない」と、絵の存在に初めて気づく。孤独を感じるが、洗面所で顔を洗って気を取り直し、ダイニングルームで窓を開けると、新鮮な空気が吹き込む。裏庭に出て、盥で洗濯を終え、服を脱いで、冷たい水を浴び、「心臓が生命力あふれるリズムを刻む」のを感じる。物語では最後までルイーザの視点が前景化され、「あの人は戻ってくる。だって私は強い女だから」と確信した言葉で結び終える。この物語では、夫婦関係における予期せぬ事態へのルイーザの反応が、仕種、行動、感情によって詳細に描述される。主人公は、心の内に秘めた強い気持ちを表出させ、前向きに生きる姿勢を見せている。

「脱走」も、女性主人公の視点がほぼ前景化された主観的物語である。結婚 12 年目を迎えているが、ここでも夫婦関係が要因で、主人公は家を出て街中を歩いている。「すべてが生まれ変わりつつ」あり、「この 3 時間の自由が、ほぼ完全に彼女を再生させ」、夫から離れたことで、開放感に浸っている。しかし、街中は暗く、海は荒れて「黒々とした暗い水」をしており、「無限を隠している」ように見える。自由になることで、自分が変わってしまうことを恐れつつも「なぜ夫たちが良識なのか」と、妻の意見が尊重されない夫との関係に不満を抱く。冷たい雨の中を歩きながら、12 年の間に一度も空腹を感じたことがなかったことに気づく。自由な朝を迎えたいが、所持金は無く、結局、「何キロもの鉛のように重くのしかかる」日常に戻るしか選択肢が無い。遅い時間に帰宅するも、妻が何をしていたのか夫は気に留めようともしない。

「勝利」と「脱走」に共通して見られる表現は、女性主人公の意識の状態が「水」によって象徴的に表現されていることである。「勝利」では、冷たいシャワーが洗礼のように、主人公の思考に生命力を与えている。一方の「脱走」では、黒い雲から降る冷たい雨は、自由を得たいという願望はあるが、経済的な自立は難しいという現実の間を揺れ動く主人公の心情を示している。表現する対象が意識であるため、その言葉は、主人公の内部に向かっており、発話によって他者へ伝えられるものではない。小説『アグア・ヴィーヴァ(流れる水)』(*Água Viva,* 1973)は、一人称の語り手の意識が瞬間ごとに捉えられるため、物語全体としてのまとまりや秩序に欠けているが、そもそも人間の生は画一的に語れるようなものではない。

画家である主人公は、絵を描くこと、思考すること、書くことを並行して行っている。「私」である語りには常に〈あなた〉という他者の存在が意識されている。「私は泉や小さな湖、滝、あらゆる豊かな水の側にいる」[3]と感じながら、拘束されない自由な言葉で記述する。『アグア・ヴィーヴァ(流れる水)』における água（水）への意識・思考・書くという象徴的意味の付与は、リスペクトルの複数の初期作品から、すでに底流を流れていたことがわかる。

２． 社会が覆い隠しているもの

ブラジルの女性作家が文学界で確固たる地位を築くのは 20 世紀に入ってからである。文学者のカルロス・マグノ・ゴメスは、『ポストモダン小説における他者性』において、「彼女たち（女性作家たち）は、家父長制的資本制社会において、女性や周縁化される人びとが排除されるプロセスについて多様な考察をするのに、この場（文学の場）を使う」と述べ、クラリッセ・リスペクトル、リジア・ファグンジス・テーリス、リア・ルフト、ネリダ・ピニョンの作品分析を行っている。ゴメスは、「これら作家たちの女性登場人物は、芸術家であるとき、違反を犯す例であり、家父長制的社会によって引き継がれた規範を再解釈」し、「社会空間」を「自分の周囲の世界」として問う存在であると分析している [4]。ゴメスの考察は、女性登場人物を芸術家に限定しているが、4 人の作家の作品で描かれる多様な女性登場人物は、自己と他者の関係を通して、家父長制的資本制社会が公正な社会でないことを問うている。1960 年代末の欧米に端を発したフェミニズムや、軍事政権期（1964～1985 年）の権威主義体制は、この時期のブラジルの女性作家たちの作品に少なからず影響を及ぼしている。リスペクトルの作品では、政治や社会制度の問題を直接的な表現を使って問題化することはないが、人物の内面の知覚や葛藤、登場人物の関係性から、女性主人公を取り巻く社会構造や問題を読者に問いかける。

「お誕生日おめでとう」では、主人公の老女アニータの 89 歳の誕生日を祝うために家族が集まる物語である。アニータには息子が６人（長男はすでに死去)、娘が 1 人いて、娘ジウダの家族とコパ

---

[3] Clarice (1990), p.34
[4] Gomes (2010), p.p.11-12

カバーナの家で同居している。その日は、息子たちが、嫁や子供、孫、そして、乳母なども連れてお祝いにやってくる。しかし、誕生日会が始まるまで、アニータはリビングのテーブルで、化粧をして着飾ったまま、まるで忘れられた家具のように放っておかれる。宴が始まるまでには家族が徐々に到着するが、主賓のアニータは口をつぐんだまま、不愛想で、家族の目には、「中身は空っぽに」しか映らない。皆で誕生日の歌で祝い、ホールケーキにナイフを入れる段になると、アニータはナイフを握り、興味津々な全員の目前で、「人殺しの拳で入刀」するのである。その後、「なぜこんな、にこにことひ弱で、厳格さの欠片もない生き物たちを産んでしまったのか」と、自分の家族であることを受け入れなくてはならないことに、怒りを抑えられず、床に向かって唾を吐き、暴言を発し、ワインを持って来るよう命じる。社会が一般に求める「優しいおばあちゃん」のイメージをことごとく打ち砕き、真逆の振舞いをして、自己を顕示する。アニータは、“家族”を演じる息子とその嫁への怒りを、偽善や形式にまだ毒されていない末息子の嫁コルデーリアが気づくように、老いて憤る身体にコルデーリアの視線を仕向けるのである。

物語は、社会で老人という存在が不可視化され、沈黙が強いられていることを明らかにする。資本主義会では、生産年齢であることが重視され、一般的に老人は社会において周縁化される。男性の老化は成熟、熟年として肯定的にとらえられることもあるが、女性には、若さや美しさこそが価値であるという社会規範が押し付けられ、老齢期について語られることは少ない。ボーヴォワールは著書『老い』で、「老人たちはいかなる経済的勢力をも構成しないので、彼らの権利を主張する手段を持たない」、「老人が若い人々と同じ欲望、同じ感情、同じ欲求を示すと、彼らは世間の非難を浴びる」[5]と論じている。リスペクトルはこの物語で、老化した身体の表象が孤独、従属した場所に置かれている状況に焦点を当て、老いた者にも、複雑な感情や、時には矛盾し、意地の悪さや情熱があることを描く。本書の短編小説「尊厳を求めて」でも、女性の老いの問題を提起している。

---

[5] ボーヴォワール(2013), p.8

３． 他者の表象

リスペクトルの作品の特徴は、デビュー作から、人物の内面に重きが置かれ、政治・社会の問題について直接言及するのではなく、社会の仕組みを思念させていることである。リスペクトルの作風については、1960 年代から 1970 年代前半に、新聞・雑誌のクロニカを定期的に書いていたことが、1970 年代の作品に新しい方向性を決定づけたと考察されている（雑誌 *Senhor*(1962-1964)、雑誌 *Manchete*(1967-1968)、新聞 *Jornal do Brasil*(1967-1973)）[6]。それまでの抒情的な作品から、現実的で時間の経過に沿ったリアリズム的な作品への変化である。具体的にはクロニカの特徴である、身近な主題、会話を採用している[7]。また、登場人物にも変化が見られ、1960 年代までの、リスペクトルの作品の女性主人公は中流階級の主婦が中心であったが、貧困層、売春婦、家政婦等のように周縁化され、社会的抑圧を受ける人々にも焦点があてられるようになる。これは、ブラジル社会においても、伝統的に女性のモデルとされたのは中流階級の妻や母親であったが、1960 年代から、女性の労働市場での進出、性の革命、マイノリティの社会運動が、女性のアイデンティティは 1 つではなく、人種、階級、出身地域、セクシュアリティなどが交差し、多様で、複雑で、不均質であることが認識されるようになったからである。リスペクトルは、こうして作家個人の経験とともに、社会の変化を作品に反映させた。

他者の表象について、文学者ヘジーナ・ダウカスタネは、ブラジル現代文学における大衆層の表象が欠如しており、中流階級出身の作家が中流階級の人物を描くことが多く、視点が限定されていると指摘する[8]。1970 年代になると、例えば、フーベン・フォンセッカが社会的周縁者との社会的距離を縮めるために、彼らが語る一人称の物語を書くようになる[9]。ダウカスタネは、リスペクトルの作品について、「他者を代弁すること、他者に声を与えることの不可能性を明瞭に演出する」と述べ、『星の時』(*A hora da estrela*, 1977)の女性主人公マカベアの代弁者である語り手ホドリゴについて考察す

---

[6] Roncador (2002), p.61
[7] *Ibid*., p.62
[8] Dalcastagnè (2012), p.18
[9] *Ibid*., p.26

る[10]。

「家政婦の女の子」は、家政婦エレミータの物語である。彼女の容姿は醜くもなく、美しくもなく、ぼんやりとした存在である。育ちは悪いが、性格は悪くはなく、恥ずかしがりやで正直で、仕事もきちんとこなしている。彼女は悲しくなると、内面世界に逃避し、自身の内面の森で誰も知らない泉の水を飲むと、安心して戻ってくる。語り手は、この平凡な人物について、自分にはよくわからないと言いながら、語りかけるような口調で、読者をエレミータに向き合わせる。

「P 語」は、フィクションとジャーナリズムを混合したような物語である。ミナスジェライス州に住む英語教師マリア・アパレシーダが、キャリアを積むべくニューヨークへ渡航するために汽車でリオデジャネイロへ上京する。彼女は前の座席にいる二人の男が、自分に関しての卑猥な会話をしている様子を耳にし、身体的な危険を察知する。パニックになり、車掌や警察に助けを求めるが、保護されるどころか投獄されてしまう。女性が言動や外見から軽視された様子を描いた悲惨な物語である。

「美女と野獣、または大きすぎる傷」は「愛」の続編のような物語である。リオデジャネイロの伝統的な家族の出身で、夫は銀行マン、3 人の子持ちで、ハイソな女性カルラが、高級ホテルのコパカバーナ・パレスを出たところで、専属の運転手が到着していないことに気づく。タクシーに乗るか、頭を悩ませていたところ、松葉杖をついた片脚の物乞いに金を無心される。カルラは物乞いと会話をする間、自分の人生において「人生の勝利」や金持ちになることを求めていたことを振り返り、物乞いとの類似性を見い出す。そうして、これまで不公正で不平等な社会に目を背けてきたことを反省し、「もう二度と同じ人間には戻れない」、「彼は永遠に彼女の人生の一部となる」ことを引き受ける決心をするのである。

旧来の社会的通念や固定観念に囚われず、“生”のあり方を模索するリスペクトルの繊細な物語は、現在もなおブラジル国内外の読者を魅了し、新しい世代にも影響を与え続けている。秀逸に訳された本書には珠玉の物語が詰まっており、未だ女性や社会的弱者が生

---

[10] 〃 , p.36

きづらさを感じる複雑な私たちの現代社会において、読者は共感と勇気を得られるに違いない。

―参考文献―

ボーヴォワール、シモーヌ・ド『老い』朝吹三吉訳(人文書院、2013)

Coelho, Nelly Novaes. *A literatura feminina no Brasil contemporâneo*, São Paulo, Siciliano, 1993.

Dalcastagnè, Regina. *Literatura brasileira contemporânea: um território contestado*, São Paulo, Horizonte, 2012.

Gomes, Carlos Magno. *A alteridade no romance pós-moderno*, São Cristóvão, UFS, 2010.

Lispector, Clarice. *Água viva*, Rio de Janeiro, Francisco Alves, 1990.

Roncador, Sônia. *Poéticas do empobrecimento*: *a escrita derradeira de Clarice*, São Paulo, Annablume, 2002.